

第26回（教育・就労合同）分科会報告書

1. 開催日時：平成28年2月26日（金） 15:30～17:00

2. 開催場所：はなやぎの里 3階

3. 参加者（所属のみ）

筑後特別支援学校、ふるさと、ぱっそ・あおぞら、さら、みんなの館、福島保育所、八幡小学校、中広川小学校、広川中学校、福島高校、西日本短期大学、八女市、広川町、リーベル

4. 実施内容

○シンポジウム

『当事者が地域で働き続けるために・・・～お仕事は楽しいです！～』

※中学校の担任であったS先生より当事者Iさんへ一言。

校区外からの入学で誰も知らない中、不安もあったと思う。中学時代に印象に残っている事が2つある。

①通学練習

入学後しばらくは両親が送迎をしていたが、入部さんは自転車に乗れるので自転車で通学できるようになってほしいと両親から希望があり、自転車通学の練習を一緒に2週間した。

②若楠園での職場体験（中3の10月～2月まで週に1回。午前中）

寒くても一緒に自転車で職場体験に行った。

学校生活でやってきたことが今の仕事に活かせていれらうらしい。

(K氏)

- ・筑特入学時からさわやかな挨拶をする子だと思っていた。実習先ではスタッフから良く声をかけられ、可愛がられるとの評価であった。
- ・筑特生徒の就職面接時には毎回K氏が同席。そこで筑特での取り組みとして「モーニングトレーニング社」の挨拶を実際に企業の方に見せる。モーニングトレーニング社で鍛えた挨拶力は筑特の強み。



(O氏)

- ・採用する人はまじめでコツコツ頑張ってくれる人、自宅が近い人と思っていた。
- ・面接時、筑特の挨拶の取り組みに感動した。挨拶は簡単なようで難しい。自分の気分や都合で挨拶がかわってしまう。当事者はいつでもいい挨拶ができるのではと思った。この挨拶が決め手となった。

(A氏)

- ・筑特では就労する生徒を対象としてデュナミスの登録会を開催する。当事者も卒業前にデュナミスに登録し、そこからH氏との関わりが始まった。

(当事者)

- ・仕事内容は掃除、食器洗い、サンプルの袋詰め。

(O 氏)

- ・元気な挨拶やコツコツ仕事を頑張るところは入社時と比べて今も変わらない。昨年、夫が挨拶の後にもう一言付け加えられたらいいねと言った。翌日から挨拶の後に「今日は天気がいいですね」など付け加えて言う事が出来るようになった。

(K 氏)

- ・学校卒業後、1 年は学校として定着支援を行っている。筑特進路支援センターも 2 年前に設立した。今回は、障害者雇用の件でお茶村から筑特に連絡があり、職場開拓へと繋がった。

(H 氏)

- ・当事者は入社当時から仕事をよく頑張っている。職場には 2 ヶ月に 1 回程度訪問をしていたが、昨年夏にお茶村より、本人にはまだ伸びしろがあるので力を伸ばしたいとの連絡があり、会議を開催。その後から会話力をつけることを目的として週に 1 回デュナミスで話をするようになった。



(O 氏)

- ・会社と家庭との連携については、連絡帳を使って家庭とのやり取りをしている。その日の本人の様子などを記入している。
- ・障害者雇用は初めて。もともと障害者と健常者が一緒に働ける場を作りたいと思っていた。

(K 氏)

- ・お茶村には当事者トピックスがある。スタッフが当事者の良い所を記入して社内広報で回覧。みんなが本人を理解して楽しい職場をつくる一助になっている。仕事の継続にはジョブマッチングとヒューマンマッチングが大切。



(O 氏)

- ・当事者を採用して職場が穏やかになった。当事者がいることで気持ちが優しくなる。当事者の返事を聞いて他のスタッフも明るく返事ができている。当事者の笑顔、挨拶がみんなに良い影響を与えている。

(H 氏)

- ・週 1 回、デュナミスでの懇談内容について。当事者はまっすぐな性格のためなかなか曲げられない部分もある。懇談では冗談も交えながら楽しい会話ができるように心がけている。初めは冗談に対して「違いますよ！」と強めに返していたが、今はにこやかな表情で「いやいや〇〇ですよ」と返すことができるようになってきた。

(K 氏)

- ・就労継続のためには支援機関との連携・協力が大切

(H氏)

- ・筑特卒業後、デュナミスにすぐに切り替えることは難しい。仕事のことだからといってデュナミスだけ関われば良いというわけではない。学校、地域の事業所と連携をとりながらみんなで本人を支援していかなければいけない。

(O氏)

- ・初めての障害者雇用で不安が大きかった。デュナミス、K氏がとても頼りになっている。筑特から繋がってきたからといっていつまでも学校に頼る事はできない。デュナミスがなければ雇用継続ができていなかったかもしれない。他の社員に対しても同じだが、本人の能力を伸ばすことは本人、会社のためになる。当事者の伸びしろはまだある。当事者がいないとだめだという存在になってもらいたい。
- ・毎年成人を迎えたスタッフにはお祝いをしている。今年、当事者が成人を迎えたのでお祝いの中で決意表明をしてもらった。

(当事者)

- ・決意表明:仕事は集中して丁寧に早く頑張ります。社員、お客様がやさしい気持ちになれるように笑顔で頑張ります。



○質疑応答、感想

Q:障害を持っている人を雇用して社会貢献をした
と思ったきっかけは？

A:きっかけは特にない。自分の母は人に対して全く偏見を持たない人だった。その影響もあってか障害者と健常者が一緒に働くことができると思っていた。健常者からあゆみ寄っていくのが自然なことで、いつかはそれを実現したいと思っていた。夫は反対した。何年もかけて説得を続けた。

Q:当事者は仕事のスピードをもっと上げたいと言っていた。そのように本人のやる気を高めるコツは？

A:特別なことをしたわけではない。一緒に達成感を味わうことで、目標を達成すると喜ばれる、だから頑張ろうと意欲づけになったのではないかな。

Q:小・中学校のうちになにをすべきか。どういう力を身に付けておくといいのか。

A:筑特では小学生のときから挨拶と掃除に力を入れている。小学生からコツコツと繰り返すことで潜在意識に落とし込める。その他、保護者に1つでもいいから何か本人に役割を持たせてくださいと伝える。その役割が将来の仕事に繋がる場合もある。

挨拶が課題の子に対しては、他のツールとしてハイタッチやお辞儀などがある。挨拶が出来なくても他の所での本人の力を伸ばしていく。

○まとめ：教育分科会

ICF では障害とは参加を妨げているものという捉え方をしている。今回のケースはどのように環境因子を整えていくのかという良い事例であったと思う。キャリア教育だけでなく、関係機関と連携をとりながら取り組んでいくことの大切さを感じた。